

双葉文庫

女流将棋殺人事件

斎藤 栄



双葉社



双葉文庫

女流将棋殺人事件

さ 01-13

著 者 斎 藤 栄

発行者 清 水 文 人

発行所 株式会社双 葉 社

〒162 東京都新宿区東五軒町 3 番28号

TEL. 東京 (03) 5261-4839

振替 東京8-117299

印 刷 慶昌堂印刷株式会社

製 本 ㈱若林製本工場

©Sakae Saitoh 1989 Printed in Japan

(落丁・乱丁本はお取りかえいたします)

定価・発行日はカバーに表示してあります

ISBN4-575-50238-3

双葉文庫

女流将棋殺人事件

斎藤 栄



双葉社

目次

花柳真子・決死の推理

幽霊と穴熊

紅蓮の殺人

砂将棋殺人

女流棋士誘拐事件

バレンタインの将棋

解説

影山荘一

305 255 205 155 105 55 7

女流将棋殺人事件

花柳真子・決死の推理

花柳真子^{はなやぎまこ}は、そのとき、NBKテレビの出演者控室にいた。そのときとは、どんなときかという、実におかしな盗難事件が発生した日のことである。

真子は、私立太陽学園高校の三年生であると同時に、将棋界では知らない者のない女流名人なのだ。このところ、女性で将棋を指す人はふえている。この人々の頂点に立つのが、真子だった。

そんなわけで、その日、真子は砂川名人と角落戦をテレビ対局するために、NBKのスタジオを訪ねたのである。

プロデューサーに、

「こちらの控室で、しばらくお待ち下さい」

と言われ、真子は出演者控室にはいった。

テレビ局というのは、ブラウン管上で見ると、素晴らしい建物と設備があるように思うが、実際はそれほどでないことが多い。このNBKの出演者控室は、ひとつの部屋に、出入口が二つあり、中央を、安いベニヤ板で区分し、別々に使用できるようにしてあった。その仕切りのベニヤ

板も、天井から三十センチ離れたところまでにしてあるのは、クーラーや換気装置の関係らしい。

真子は、ポップアップ式の椅子に腰かけ、しばらくボンヤリしていた。今日、対局する砂川名人は、弱冠二十一歳で棋界の最高位についた天才である。角を一枚、落としてもらっても、勝てるかどうかは分からない。しかし、テレビの視聴者は、男の名人と女流名人の対戦という好カードだから、きっと大勢がテレビのチャンネルをNBKに廻してくれるに違いないのだ。

「全力を尽くすだけだわ」

と、真子は思った。

じきに、砂川名人や、真子の師匠で、今日、立会役の永田九段などが、顔を見せるだろうと思っっていると、急に隣の区画が賑やかになり、三、四人の人が、ベニヤ板の向こう側にはいつて来た気配がした。

真子は、ふと天井を見あげた。その天井板は、艶のある合成の白い化粧板でできていた。蛍光灯の光がそこに反射して、今、はいつて来たのは、男三人に女一人だと分かった。

「……この間、主演された『広島の子』というのはよかったですよ」という男の声がした。

隣に、真子がいることを、ほとんど意識していない調子である。

「あら、そうかしら……」

返事しているのは、四十がらみの女優だった。

『広島の子』の主演といえば、実相寺優子に違いない、と真子は気がついた。ベテラン女優であるし、近頃は週刊誌にペンをとったり、本を出版したりで、大活躍している。

「実感の籠った演技で、実によかった」

「お世辞がうまいのね」

「立花さんの『真夜中のルーザー』も役柄ピッタシで、迫力充分でしたよ」

「またまた……」

たばこに火をつけたのが、若手俳優の立花久寿夫だということも、この会話でハッキリした。こんな風にして、四人はしばらく、隣室の真子に気づかないで喋り合っていたが、やがて、

「私、ちょっと……」

という声と共に、実相寺優子が一人だけ、どこかへ出ていった。

しばらくすると、話の内容から、番組担当のプロデューサーと思われる男が席を離れ、次に、年配の男が部屋を出ていった。最後に一人残った立花も、間もなくドアをあけて消えた。

2

永田九段が砂川名人と共に、控室にはいつて来たのはそれから五分後のことであつた。

「いや、すまんすまん。車が渋滞でね。すっかり待たせてしまった」

と、陽気な永田は、禿げあがった額を、ハンカチで拭きながら弁解した。若い名人は、ニコニコしているばかりだった。

「いいんです。私、一人で空想に耽^{ふけ}っているのが好きですから……」

真子は、セーラー服の制服姿で、椅子から立ちあがった。

九段が何か言いかけたときである。突然、廊下から一人の女が飛び込んできた。実相寺優子であつた。

優子は、中年なのに、真つ赤なセーターを着、髪は派手に三色を使って染めていた。

「あのね、隣の部屋に、誰か、はいらなかつたかしら？」

大きなサングラスをかけているが、その下で、頬の筋肉がビクビクと震えるのが見えた。

「え？」

永田と砂川名人は、その権幕の激しさに、呆^あつ氣にとられた。

真子はハッキリと、

「誰もはいりませんわ」

と言つた。

すると、優子は気色ばんだ表情と物腰で、

「私のショルダーバッグがなくなつてしまったのよ、ちよつと部屋を留守にした間に……。おかしいわ」

と、まるで、へこの中に犯人がいるとでも言わんばかりだつた。

「でも……さっき、三人の男の人がご一緒だつたでしょう？」

真子は、高圧的なこの女優の態度に不快な感じがしたので、こつ言い返した。

「いたわよ」

「その三人の男に訊いてご覧になりました？　どなたかが、お預かりしたんじや、ありませんの？」

「シヨルダーバッグを、男のひとに預けるわけはないでしょう。あの中には、二千万円もする真珠のネックレスがはいっていたんですよ。二千万ですよ……」

それがどんなに高価なものかを、優子は強調した。

「とにかく、ここの者は、誰も知らないのだし、隣の部屋で盗られたのなら、そっちを捜すことですな」

永田九段は、半ば逆上したような女優の態度を見て、冷ややかに突き離れた。

「……………」

優子はそのまま、踵を返した。

「なんだい、あの女は？」

永田九段は、呆れたように言った。

「わりと有名な女優さんですよ」

砂川名人は、落着いた声で九段に説明した。

「失礼だわ。二千万円の真珠のネックレスがはいったバッグを、まるで、私が盗ったみたいに言うんですもの。さっき、隣の部屋には、あの女のほかに、三人の男のひとがいたんです」

真子は、師匠に訴えた。

「真子がそんなことをするなんて、わしらは夢にも思わんから……。あの女は実に下らん……」
永田は怒った。

「誰がいたんですか？」

名人が静かに訊いた。

「三人の中には、立花久寿夫という俳優さんがいたのは確かですけど……。ほかの二人は若い人と年配の人……」

「どうして、それが分かったかね？」

九段が驚いて訊いた。

「それは、天井の板に、姿が反射して見えたからです」

真子が言うと、九段は天井を振り仰いだ。

「なるほど、あんな風に隙間があいているのか。じゃ、三人のうち、誰がバッグを持っていたかは、見えなかったのかい？」

「そこまでは見えませんでした」

こんな話をしているとところへ、テレビ対局の担当プロデューサーやアシスタント達が現われた。

永田九段は、真子の名誉のために、実相寺優子に抗議しようと考えたらしいが、生放送開始の時刻が迫っていたので、このときは、このままスタジオ入りしてしまった。

砂川名人と真子の角落戦は、近來にない名局といわれるほどの対局になった。真子は、じっく

りと組上げた後、チャンスを見て、激しく攻めた。二枚腰の名人はなかなか土俵を割らなかった。しかし、真子も、女流名人の名誉にかけて頑張った。

「それまで」

と名人が言つて、駒を投げたとき、どちらも秒読みの大激戦となっていたのである。

3

生放送が終つて、再び、出演者控室に戻つて来ると、真子を待っていたのは、刑事だった。

青木というその若い刑事は、名前の通り、蒼白い陰気な顔をしていた。

「参考までに伺いたいんですが……この隣の部屋で、高価な装飾品がショルダーバッグごと盗まれたのを、ご存知ですか？」

後で分かったことだが、実相寺優子は、バッグが盗まれたと知るや、ただちに公衆電話を使い、110番したのだそうだ。

「ええ、知っています」

と、真子は答えた。

「あなたはそのとき、こちらの部屋にいて、隣室の様子を聞いたり、見たりしていたのでしよう」

青木刑事は、低い声で訊いた。

「見るといつても、あの天井に映^{うつ}っている人の影みたいなものですわ」

「ま、とにかく、そこで伺いたいのは、どんな人間が、シヨルダーバッグを盗^とっていったかですよ」

「それは分かりません」

真子の返事が、あまりにキツパリしていたので、青木刑事はムツとしたらしい。

「あんた、見ていたのでしょう？」

と、重ねて訊いた。

「本人が分からないと言っただから、そんな風に訊いても無理ですよ」

永田九段が見かねて、横合いから口を出した。

「先生。いいんです。警察のひとは、私を疑っているんです。だから、私、納得できるまでお話しますわ」

真子は、ちょっと意地になった。あの優子が、この刑事に対して、どんな言い方をしたか分からない。

——隣の部屋にいた若い女が怪しい。

こんな風に匂わせなかったとは言えない。

「分かっていることがあったら、聞かせてもらいたいです」

青木刑事は、真子の勢いに、多少、出鼻を挫^{くじ}かれた感じだった。

「お話をする前に、私、教えていただきたいことがあります」

と、真子は言った。